2019年4月1日に出発し、4月2日に現地フィレンツェ(イタリア)に到着し、以後、2019年9月10日まで、調査旅行以外はフィレンツェに滞在し、研究を行った(帰国日は2019年9月11日)。受け入れ先はフィレンツェ大学である。

研究は基本的にフィレンツェ国立古文書館で行った。研究テーマはトスカーナ大公国における古くからの封建貴族である。トスカーナには、君主国成立(1532 年)以前からの古くからの封建貴族と、君主国成立後に君主が叙任した新しい封建貴族がいるが、本研究は前者を対象としている。古くからの独立独歩の封建貴族と新しい君主がどのような関係を結んだのか、彼らの特権や独立性はどれくらい守られたのか、あるいは侵害されたのかを調査するものである。

史料としては、トスカーナ大公国における封建貴族層の書簡(Mediceo delPrincipato)や裁判文書(Magistrato Supremo)、請願の記録(Pratica segreta)、特権の記録(Libro di Privilegio)などを調査し、とくに必要なものはその場で写し、今後必要になる可能性のある文書については、写真撮影を行った。本調査からは様々な発見があったが、とくに興味深かったのは、封建貴族が持っていた特権についてである。モンテ・サンタ・マリア侯ブルボン家は、1494 年(共和国時代)からずっと、フィレンツェ共和国のちにはトスカーナ大公国のバンディーティ(匪賊)を毎年一人選んで、赦免を与える権利を有していた。彼らの領地は皇帝封土であり、フィレンツェ共和国あるいはトスカーナ大公国とは別国家であるにもかかわらずである。トスカーナ大公国における封建貴族の地位の高さ、彼らの独立性を示すものであろう。しかもこの特権についてはいまだ誰も言及しておらず、新しい発見であると思われる。今後、イタリア語あるいは英語で論文を執筆し、国際的な場で発表する予定である。

モンテ・サンタ・マリア侯ブルボン家については、すでに日本語で1本論文を書いているが、その論文で書いた時代の後の時代についても調査することができた。彼らは長い間分家同士で対立しており、それは私が考えていたよりも長く続いていたことが判明した。ただし、その対立を収めるために君主に依存するという傾向は

変わらず、そのために君主への依存度は高まったのではないかと考えている。つまり特権を持ち、独立性は維持するものの、いくつかの点では独立性を失い、君主の支配下に入っていったと考えられるのである。それは、匪賊(バンディーティ)への態度でもわかる。古くからの封建貴族の土地は不入の権利を持っており、そこへ逃げ込んだバンディーティはトスカーナ大公国によって捕縛されることはないはずであるが、1570年代になると、引き渡しを求められたブルボン家は最終的にそれに応じている。このような点からも、独立性の一部喪失が見受けられる。この点についても論文にまとめる予定である。

さらにこれまでは、フィレンツェ共和国に臣従していた封建貴族のみを研究してきたが、今回の滞在では、シエナ共和国に臣従していた封建貴族、たとえばサンタ・フィオーラ伯スフォルツァ家などについても史料調査を行った。彼らはシエナ戦争によってトスカーナ大公国がシエナ共和国を支配下に置くことになってから、メディチ家に臣従した。それ以前はシエナ共和国に臣従していたということは、シエナ戦争ではメディチ家の敵だったにもかかわらず、いくつかの史料を見る限り、メディチ家への臣従は比較的スムースに行われたと思われる。スフォルツァ家は早くからメディチ家と結びついて情報提供などを行っているし、メディチ家とは直接関係のない洗浄などに赴いても、状況を手紙で知らせ続けているのである。彼らの関係については、集めてきた史料をさらに精読する必要がある。

フィレンツェ国立図書館では、日本には存在しない文献を集めることができた。

2019年は、私が研究しているトスカーナ大公国の二代目の君主コジモ1世の没後500年記念の年であった。そのためコジモ1世関連の研究会や展覧会が複数開かれており、それらに参加することができた。とくに興味深かったのは、「コジモの足跡の中に」と題された研究集会(2019年6月6日)で、コジモ1世の様々な事績を振り返ることを趣旨としており、改めてこの君主の全体像を確認することができた。展覧会では、ウフィツィ美術館で開かれた「100人の軽騎兵」で、これまであまり研究されてこなかったコジモ1世のもとで活躍した軽騎兵たちの実態をビジュアルにみることができた。このほかにも、16世紀の祝祭を再現した催しがボーボリ庭園で開かれ、これも見ることができた。

また今回の滞在中には、トスカーナ大公国のなかでも辺境地帯であり、封建貴族が住むと同時に匪賊たちも多かった地帯(カストロカーロやマッサなど)や、イタリアの対岸にあり、かつてはほとんどがヴェネツィア領で、フィレンツェとも商業上のつながりがあったクロアチアの海岸地帯を訪ねることができた。実際に訪れることで、地理的な状況を知ることができ、当時の状況をイメージすることが可能となった。